



Title	PräteritumとPerfektの意味について
Author(s)	山田, 恵子
Citation	独語独文学科研究年報, 7, 65-83
Issue Date	1981-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25576
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_P65-83.pdf



Präteritum と Perfekt の意味について

山 田 恵 子

0. 序

ドイツ語において、Tempus という文法カテゴリーで把握されている6つの言語形式は何を表示しているのだろうか。Tempus は Zeitform と表現されるように、伝統的には物理的時間を表わす文法形態だと考えられていた (Präsens = Gegenwart, Präteritum = Vergangenheit, Futur I = Zukunft, Perfekt = Vollendete Gegenwart, Plusquamperfekt = Vollendete Vergangenheit, Futur II = Vollendete Zukunft)¹⁾。ところが周知の如く、このような物理的時間の区分ではすべての言語事実を捉えることができず、最近の研究では時制の時間概念を否定する見解が現われるにまで至っている。

本稿は Prät. と Perf.²⁾ について、このような時制をめぐる問題に言及しながらこれらの文法形式が一体何を意味しているのかを考察する。

1. 時制 (主に Prät., Perf.) に関する研究状況

時制の意味を捉える際に、方法論の違いはあるにしても大別して2つの立場が認められる。1. 時制の時間関係を否定し話し手の心的態度に基づかせる立場。2. 時制を基本的には時間関係で捉えようとする立場。これらの立場の相違は、1969年に出版された論文集「Der Begriff Tempus — eine Ansichtssache? (Beiheft zur Zeitschrift “Wirkendes Wort” 20, Schwann, Düsseldorf)」にも顕著に現われている。1.の立場をとるものには、Kluge (1960, 1969), Weinrich (1964, 1971), Brinkmann (1962) 等が挙げられる。2.の立場をとるものは、Gelhaus (1966, 1969), Baumgärtner/Wunderlich (1969), Wunderlich (1970), Reichenbach (1947), Hauser-Suida / Hoppe-Beugel (1972), Latzel (1977) 等である。

これらの立場において、Prät. と Perf. は具体的にはどのように記述されているのだろうか。

1. 1. 時制を話し手の心的態度に基づかせる立場

上述の論文集の中で、時制を時間関係で捉えるならば一部のことしか説明できないと批判し、[Die Tempora sind Ansichtssache (S. 68)]と言明したのは Kluge (1969)であった。彼は既に1961年の論文において、Prät.を「物語りの時制(Tempus des Erzählens)」、Perf.を「会話の時制(Tempus des Gesprächs)」と見做し、その論拠として下記の文を引用している。

- (1) Ich habe meine Tante gesprochen und bei weitem das böse Weib nicht gefunden, das man bei uns aus ihr macht.
- (2) Letzthin kam ich zum Brunnen und fand ein junges Dienstmädchen, das ihr Gefäß auf die unterste Treppe gesetzt hatte und sich umsah, ob keine Kamerädin kommen wollte, ihr es auf den Kopf zu helfen. Ich stieg hinunter und sah sie an.

この例文は『若きヴェルテルの悩み』の中の一節である。(1)は実際の会話部分ではないが、会話風(「gesprächsartig」)の心的態度が認められるので Perf. が用いられているのであり、(2)は物語り風(「erzählend」)の心的態度が認められるので Prät. が用いられているのだと説明される。

Weinrich (1964, 21971)はこの見解を更に発展させ、Textlinguistik の立場から時制体系を考察している。彼はテキストにおける時制の分布(Tempus-Distribution)の現象と、そのテキストの内容に基づき時制を2つのグループに分類した。Prät. は Plqu., Kon-ditional と共に物語られる内容のテキストにおいて支配的であり、「物語る時制(erzählende Tempora)」と呼ばれる。Perf. は Präs., Fut. I, Fut. II と共に言及される内容のテキストにおいて支配的となり「言及する時制(besprechende Tempora)」と呼ばれる。これら2つの時制グループはともに話し手の話す態度(「Sprechhaltung」)を反映し、話し手は物語る時制を用いることによって聞き手に弛緩(「Entspanntheit」)の態度を要求する。これに対し、言及する時制を用いた場合は聞き手に緊張(「Gespanntheit」)の態度を要求する。更にこれらの時制グループはテキスト内の部分的相違を越えて、種々の広い意味での文学ジャンルによって代表されるような話し場の(「Sprechsituation」)との関連性を示す。言及する時制は、叙情詩、戯曲、ダイアローグ一般、文学批評的随筆、学問的で哲学的な散文において支配的であるのに対し、物語る時制は、短編小説、長編小説、あらゆる種類の物語(「Erzählung」)(但しこれらの

場合ダイアログを除く)において支配的であると考えられている。

Brinkmann (1962)も、時制とは単に時間区分(「Zeitstufe」)に関係づけられるものではなく話し手の態度の区別を示すものであり、この態度から初めて時間への関係が生じると考えている。しかし Kluge 及び Weinrich が示した「物語る」という態度は Prät. だけではなく他の形(たとえば Präs.)でも表わし得るので、Prät. を「回想の時制(Tempus der Erinnerung)」と見做した。回想は現在との時間的断絶を前提とするが、回想された時間は Prät. によってつくられた回想レベルにおいて連続体(「Kontinuum」)として現われるのである。これに対し、Perf. は回想レベルとの断絶を止揚する。haben (sein) の現在形と完了形式(Vollzugsform)の結合形態は時間の二分化を含蓄しているが、同時に Einst と Jetzt の分離を否定する姿勢を意味しており、過去の出来事と現在の話し手の間には相関関係が存在している。話し手は既に実現している出来事に対し一定の態度をとるので、Perf. は「判断(Urteil)」を表わす時制と見做されている。

このような心的態度に基づく Prät. と Perf. の意味の記述は、引用された例文に対して、また一般的にもかなり妥当性は認められるが、全ての言語事実に対する客観的規準とはなり得ないであろう³⁾。たとえば下記の文において心的態度の区別は認め難い。

Spiegel : Kennzeichnend für das System ist noch etwas anderes : Sie wurden nicht verurteilt für das, was Sie getan haben, sondern wegen angeblicher nachrichtendienstlicher Tätigkeit.

(Spiegel 1979, Nr. 43 Gespräch, S. 20)

Bahro : Die Hälfte der Zeit haben wir diskutiert, der Vernehmer und ich, über das Buch und über alles mögliche. Über alles, was geistig zu mir gehört. Das strich nichts von der Härte der Untersuchung ab.

(Spiegel 1979, Nr. 43 Gespräch, S. 27)

これらの心的態度は後述のように Prät., Perf. 自体がもつ機能によって結果的に生じてくるものだと言えよう。

1. 2. 時制を基本的には時間関係において捉える立場

時制を時間関係で把握するといってももちろん伝統的な単なる時間の3区分だけで説明するのでは

なく、時制の直示的 (deiktisch) な機能が重要視される。

Gelhaus (1966, 1969) は、Kluge の説を「主観的で曖昧な印象」に基づいていると批判し、Prät., Präs., Fut. I を「発話時点における行為の完結 (Abschluß) 及び開始 (Beginn) 」というレベルで捉え、Perf., Plqu., Fut. II に対しては更に「Verfügen」(あるいは「Vorhandensein」) という概念を用いて規定した。Prät. は「行為 (Tun = Sein oder Geschehen) が発話時点で完結している」ことを表わし、Perf. は「完結した行為 (ein abgeschlossenes Tun) の「Verfügen」(あるいは非人称の表現の場合は完結した行為の「Vorhandensein」) が、発話時点で完結していない」ことを表わす。彼は「Verfügen」という概念を「besitzen に近い意味」⁴⁾ だとし、「dem Sein oder Wesen von etwas zugehören」, 「jemandem zu eigen sein」, 「zu jemandes Befindlichkeit gehören」とパラフレーズしている。Perf. を用いた文は次のように解釈される。

Mein Freund ist gestern abend verunglückt, als er mit dem Auto nach Hause fuhr.

→ Der Freund verfügt über ein bestimmtes abgeschlossenes Tun (d.i. verunglücken), dessen Ablauf zeitlich auf gestern abend festgelegt ist.

Morgen um diese Zeit bin ich schon lange nach Berlin abgereist.

→ Ich verfüge morgen um diese Zeit schon lange über ein bestimmtes abgeschlossenes Tun (d.i. nach Berlin abreisen).

過去及び未来の事柄を表わす Perf. が同じように「Verfügen」の Präs. で捉えられるのだが、Perf. を用いた文にいつもこのような「Verfügen」の意味があるとは限らない。

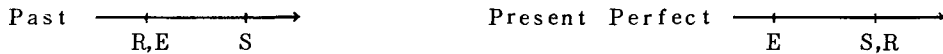
Früher haben die Israelis den Sinai allein besetzt, heute sind es die Israelis zusammen mit den Amerikanern.

(Spiegel 1979, Nr.27 Gespräch, S.103)

下線部の Perf. を「Verfügen」を用いて解釈するならば、この文の意味は正しく理解されないだろう。2つの文のコンテキスト (Früher ..., heute ...) から明らかなように、ここで使われている Perf. は、単に行為が発話時点よりも以前に生じたということを表わしているにすぎない。ま

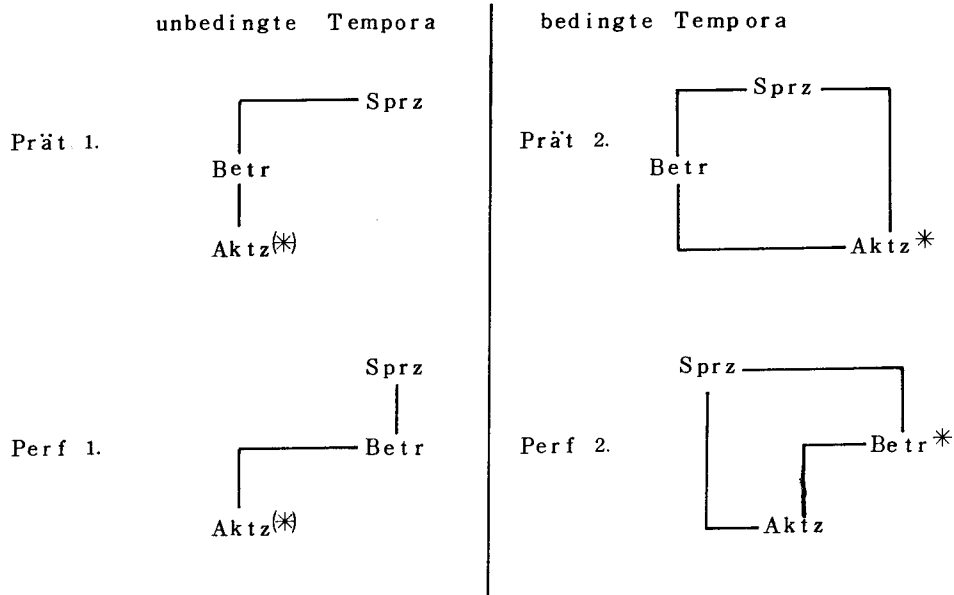
た逆に、Prät. の意味を行為と発話時点との関係だけで捉えることは、Prät. の意味機能を十分説明できないであろう。

Reichenbach (1947) は、時制を token-reflexive symbol (時制が示す時間はそのつどの発話を引き合いに出さないと決められない) と考えるが、時制の意味を単に token の時点つまり発話時点 (S) と出来事が生じる時点 (E) との関係で捉えるのではなく、指示の時点 (R) を指し、これらの 3 つの時点の関係によって示した。指示の時点とは、話しコンテキストによって決定されるとする。彼は Past と Past Perfect で書かれた物語りを引用し、Past で物語られた出来事の連続が指示の時点 R を S よりも前にあると決定すると、説明した。Past の場合、E と R が同時で、この 2 つは時点は S の前に置かれる。これに対し、Present Perfect の場合の指示の点を説明するために彼は「I have seen Charles」 という文 (statement) を例にとり、E は S より前にあるが S と同時に位置する R に関係づけられると考えた。2 つの時制は次のように図示される (時間の流れを左から右へ伸びる直線 → で表わす)。



このように Past と Present Perfect の相違が示されるのではあるが、Wunderlich (1970, S. 123) も指摘しているように指示の時点という概念があまり明確にされていない。Reichenbach は英語に関して考察しているが、ドイツ語の場合、たとえば前述の Spiegel の例文 (S. 67) のように Präs., Prät., Perf. が同時に用いられているコンテキストでは、それぞれの指示の時点はどのように決定されるのであろうか。

Baumgärtner / Wunderlich (1969) も Reichenbach のように 3 つの時点の関係によって時制の意味を記述している。彼等の場合、この 3 つの時点は発話時点 (Sprz.)、行為の生じる時点 (Aktz.)、その行為が話し手によって観察される (betrachten) 時点 (Betr.) である。Betr. の概念を導入する契機となっているのは、Plqu. と Fut. II の意味を捉えるためであった。たとえば Plqu. を用いた文、Gestern hatte Karl die Reise schon seit 3 Tagen beendet. において、「gestern」は Aktz. ではなくて Betr. と考えられる。この考察から時制体系を統一的に捉えるため、すべての時制に Betr. が記され Prät. と Perf. の意味は以下のように区別された。⁵⁾



横の線は物理的時間の流れ（左→右）を、縦の線は時間的重複を表わす。

は時間の副詞を表わし義務的に用いられる。()は時間の副詞の随意的使用である。

例文 Prät. 1. Ich kam gestern von Berlin.

Perf. 1. Ich bin gestern von Berlin gekommen.

Prät. 2. Was gab es die nächsten Tage im Theater? Morgen spielten sie Galilei, übermorgen (spielten sie) Wozzeck.

Perf. 2. Er hat morgen seine Prüfung bestanden.

この Prät. 1. 及び Perf. 1. の図式と Reichenbach の図式を比較すると、Betr. と R が時間的に同じ位置であることがわかる。Reichenbach では R の概念規定が明確ではなかったが、その R はともかく話しコンテクストに見い出されるものであったのに対し、Baumgärtner/Wunderlich では Betr. の概念を規定したものの Prät. と Perf. の場合それはきわめて心理的な要素を含んでおり、後に Wunderlich (1970) 自ら批判し Betr. を排除した。

この論文 (1970) では、Plqu. 及び Fut. II を説明するためにこれまで用いられていた Betr. が、コンテクストにおいて与えられた Zeitintervall だと見做される。これについては後述することにしてまず生成変形文法に基づいた Wunderlich の見解を説明しよう。彼は統語構造に理想化された発話場面を記入し、時制と時間の副詞 (句、節) との関係体系を体系化した。標準理論では、基底部の書き換え規則 ($S \rightarrow NP \widehat{\text{Predicate-Phrase}}$, $\text{Predicate-Phrase} \rightarrow \text{Aux} \widehat{\text{VP(Place)}}$ (Time), $\text{Aux} \rightarrow \text{Tense (Modal) (Aspect)}$) によって時制の文法的形式素が深

層構造に導入される。この場合時制は接辞の無標・有標により Present と Past に書き換えられ、Perfect と Futur は時制とされずそれぞれ Aspect 及び Modal として扱われるのだが、Wunderlich はこれらのものを統語的にも意味的にも Präs. や Prät. と同じような単位として考え、時制と見做している。時制は、基底部において時間を表わす相関的なメルクマール〔T_{mp}〕として捉えられる。時制の伝達機能とは、話し手が時制の助けをかりて「出来事 (Ereignis)」を話す行為 (Sprechereignis) への時間的な関係の中で規定することであり、この「出来事」というカテゴリーは動詞句ではなく文というカテゴリーに相当する。それ故彼は、〔T_{mp}〕を文節点に直接付与して時間の副詞 (句, 節) との関係を示す。時間の副詞は、発話時に関係するもの (Advb_s; morgen, gestern 等)、発話時と重複するもの (Advb_ü; heute, jetzt 等)、コンテキストに関係するもの (Advb_k; vorher, nachdem 等) の3つのグループに分類される。このうち Advb_s には既に特定の〔T_{mp}〕 (たとえば gestern ならば出来事が発話時より前に生じたということ) が内包されているので、時制の〔T_{mp}〕は余剰的である。そこで文 S は、時制の〔T_{mp}〕を担うものか、Advb_s を含むものかに分けられる。

$$S \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [S, T_{mp}] ; S' (Advb_{\ddot{u}}) (Advb_k) \\ [S] \quad ; S' Advb_s (Advb_k) \end{array} \right\}$$

S' は時制と時間の副詞を含まない文を表わし、S' → NP VP となる。

時制の〔T_{mp}〕は下位範疇化規則によって、発話時 (s) と出来事の生じる時 (a) との関係を導出する。

$$[T_{mp}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} [\beta \text{ vor } s] \\ [a \text{ nach } s] \\ [a \text{ übl } s] \\ [\beta \text{ übl } s] \end{array} \right\} \\ \left\{ \begin{array}{l} [a \text{ vor } s] \\ [a \text{ nach } s] \\ [a \text{ übl } s] \end{array} \right\} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} [+V, +transf] \\ \text{sonst} \end{array} \right\}$$

übl = überlappt, transf = transformativ

移行的 (transformativ) 動詞とは Vorzustand (α) から Nachzustand (β) への移行を表わす動詞である。たとえば einstehten, aufstehen, ankommen, kaufen 等で語彙項目に

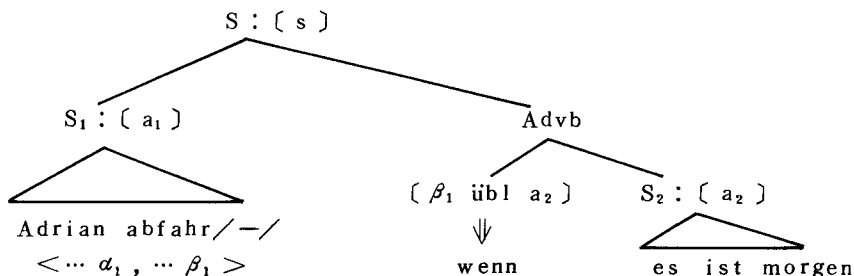
は einschlafen = <wach sei α , schlaf β > (条件 [α vor β]) のように記載される。
 Advb_s の場合は下記の下位範疇化規則によって [Tmp] が導き出される。

$$\text{Advb}_s \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [\text{ Advb}_s, \text{ Tmp}, a \text{ vor } s, \pm \text{ Öff }]^{6)} \\ [\text{ Advb}_s, \text{ Tmp}, a \text{ nach } s, \pm \text{ Öff }] \end{array} \right\}$$

これらの導出された時間関係に基づき、[Tmp] は変形規則によって初めて個々の時制メルクマー
 ルに置き換えられる。

$$[\text{ Tmp }] \Rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} [\text{ Fut II }] \\ \dots \\ [\text{ Prät }] \\ [\text{ Perf }] \end{array} \right] \begin{array}{l} / \\ \text{sonst} \end{array} \left[\begin{array}{l} [\text{ Hypoth }]^{7)} \text{ —} \\ \text{ —} \end{array} \right] \begin{array}{l} / \\ \end{array} \left[\begin{array}{l} [a \text{ vor } s] \\ [\beta \text{ vor } s] \\ [a \text{ vor } s] \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} [\text{ Fut I }] \\ \dots \\ [\text{ Präs }] \end{array} \right] \begin{array}{l} / \\ \text{sonst} \end{array} \left[\begin{array}{l} [\text{ Hypoth }] \text{ —} \\ \text{ —} \end{array} \right] \begin{array}{l} / \\ \end{array} \left[\begin{array}{l} [a \text{ übl } s] \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} [\text{ Präs }] \\ [\text{ Fut I }] \end{array} \right] \begin{array}{l} / \\ \end{array} [a \text{ nach } s] \\ [\text{ Perf }] \begin{array}{l} / \\ \end{array} \left[\begin{array}{l} [\beta \text{ übl } s] \\ [a \text{ vor } s] \end{array} \right] \end{array} \right\}$$

Prät. と Perf. については移行的動詞が $\left[\begin{array}{l} \beta \text{ übl } s \\ a \text{ vor } s \end{array} \right]$ の条件を満たす場合にのみ Perf. の義務的使用が示され、その他の [a vor s] の場合には随意的使用 (Prät. あるいは Perf.) とされる。Baumgärter/Wunderlich の論文 (1969) での Prät. 2. に相当する表現は、特別な変形過程で説明されているがこの点については 2.1.4. で触れることにする。Plqu. と未来のことに関する Fut. II (あるいは Perf.) もこの規則では導出されていないが、これらはコンテキストで与えられた Zeitintervall との関係で説明される。たとえば Morgen um diese Zeit ist Adrian abgefahren. は、深層構造的な文 Wenn es morgen um diese Zeit ist, (dann) ist Adrian abgefahren. にパラフレーズされる。



コンテキストによって与えられた Zeitintervall とは S_2 で示される時間 a_2 であり、これは発話時との関係で $[a_2 \text{ nach } s]$ である。 S_1 は移行的動詞を含むので行為の後の状態 β_1 が記され、 β_1 と a_2 との関係は $[\beta_1 \text{ uebl } a_2]$ である。この2つの時間的關係によって Perf. (あるいは Fut. II) が生じることになる。

以上のように時制と時間の副詞との関係が明示され、時間關係に基づいて時制を生成する人間の言語能力の記述が試みられているが、Betr. の概念を排除した結果 Prät. と Perf. に関しては行為と発話時との関係で示され、Perf. の義務的使用と Prät. の特殊なものを除けば Prät. と Perf. は随意的使用となっている。

2. Prät. と Perf. の義務的使用と随意的使用

今まで見てきたようにドイツ語の Prät. と Perf. は英語に比べると明確な区別をたてにくいだが、ここでそれぞれの義務的及び随意的使用⁸⁾を考察してみよう。

2.1. Prät. の義務的使用 (Perf. は使用不可)

以下に挙げる Prät. の義務的使用は、単純に $[a \text{ vor } s]$ という時間關係では説明できないものであるが、「erzählend」「Erinnerung」等の話し手の心的態度によっても説明されない。それならばこれらの例は、Prät. のどういう意味機能によって使用されているのであろうか。

2.1.1. 下記の従属文の Prät. は Präs. に書き換え可能である。(1)では「あなたが誰なのか」ということは $[a \text{ vor } s]$ に限定されることではない。(2)の従属文もまた普遍妥当的な真理である。これらの Prät. は上位文の Prät. に同化 (Assimilation) されたものであり、上位文の過去の意味を有するコンテキストのレベルを指示しているにすぎない。この場合 Perf. を用いると $[a \text{ vor } s]$ を表わし (2.2.1.を参照)、普遍妥当的な意味内容と矛盾する。

(1) Wußten Ihre Mitgefangenen, wer Sie waren ?

(Spiegel 1979, Nr.43 Gespräch, S.27)

(2) Ich wußte natürlich, daß die Winkelsumme im Dreieck 180° betrug.

2.1.2. 下記の従属文の Prät. は接続法に書き換えられ、過去の事実を表わすものではない。この Prät. も上位文の過去の意味を有するコンテキストを指示している。

(3) Wir wollten verhindern, daß die Konferenz zu einer Auktion,
einem Ölbasar wurde.

(Spiegel 1979, Nr.53 Gespräch, S.71)

(4) Oft genug habe ich ihr ein Taxi spendiert, damit sie pünktlich
kam.

(H. Böll : Ansichten eines Clowns, Hauser/Hoppe (1972) より引用)

2.1.3. Modalverben は客観的用法と主観的用法に区別される。客観的用法では、主語と不定詞で述べられる事柄との間の関係が表示されるのに対し、主観的用法では、話し手が、主語に関して不定詞で述べる事柄を主観的にどのように判断するかが示される (Duden Grammatik)。客観的用法の場合は Prät. を Perf. で書き換えられるのに対し、主観的用法の場合 Perf. は認容不可能である。

(5) 客観的用法

Prät. : Sie konnte/mußte/mochte/sollte/wollte/durfte Wein
trinken.

Perf. : Sie hat Wein trinken können.

(他も同様に書き換えられる。)

(6) 主観的用法

Prät. : Sie konnte/mußte/mochte/sollte/wollte schön gewesen sein.

(但し dürfen はこの用法の場合接続法が用いられるのでここでは除外する。)

Perf.* Sie hat schön gewesen sein können.

(他も同様に書き換えられない。)

主観的用法の場合、Perf. がなぜ認容不可能なのであろうか。(6)の Prät. が表わす意味は、この単文だけでは説明できないので下記の文章で考えてみる。

(7) Wie alt war Ihr Freund, als Sie ihn kennenlernten ? — Er mußte damals etwa 25 Jahre alt gewesen sein.

(Schulz-Griesbach: Grammatik der deutschen Sprache, Sansyusya, 1972, S. 126 より引用)

下線部の Prät. は Präs. に書き換えられる。話し手の主観的な考え自体は、いつも発話時に生じるので、その考えを示す Modalverben は Präs. となる。換言すれば、主観的な考え自体は「発話時より以前であった」とことは相容れない。従って(7)の Prät. (mußte) は「müssen」自体が発話時より前であることを表わしているのではなく、前文の過去の意味を有するコンテキストに影響されて生じたのである。Perf. を用いると「müssen」自体が発話時より以前のことであることを示すので認容不可能である。

2.1.4. 下記の Prät. も [a vor s] を示しているのではない。(8),(9),(10),(11)は現在に関係している事柄であり、(12)は未来に関係した事柄を述べている。これらの場合、2.1.1.及び2.1.2.において見られたような Prät. の使用を導く上位文もないし、2.1.3.におけるようなコンテキストの前後関係も存在しないが、実際には言葉としては現われてこない文との関係で用いられ、一種の混交 (Kontamination) と考えられる。

(8) Wie war (doch) Ihr Name ?

(9) Wer unter Ihnen war (doch gleich) Vegetarier ?

(10) Was gab's doch gleich heute in der Mensa ?

((9),(10)は Latzel 1977, S. 143 より引用)

(11) Wer erhielt das Bier ? (レストラン等における給仕の発言)

(12) Was gab es eigentlich morgen im Theater ? — Morgen gab es den Faust.

((11),(12)は Wunderlich 1970, S. 140 より引用)

(11)と(12)に対して Wunderlich は次のような特別な変形過程を考えている (下線部の動詞 (Prät. と Präs.) が混交されて erhielt あるいは gab が生じる)。

⑪ Wer bestellte ein Bier ? Ich habe hier ein Bier.

Wer erhält das Bier ? \Rightarrow Wer erhielt das Bier ?

(あるいは、Wer wollte, daß er ein Bier erhält ?
Ich habe hier das Bier. \Rightarrow Wer erhielt das Bier ?)

⑫ ich hörte(las) [morgen gibt es den Faust im Theater]_s.

(あるいは、[morgen gibt es den Faust im Theater]_s wurde bekannt-
gegeben.)

このような変形から明らかなように、発話されない文がどのようなものであるかはそれぞれの状況に依存しているのであるが、いずれも過去の意味を有するコンテキストをもち、Prät. はそれを指示していると考えられる。

2.1.5. 下記の文は「出身」を意味し、「彼」が生まれた時点から後もずっとその事実は不変であり、普通ならば Präs. になるところである。この場合、2.1.1.とは違って動詞の意味素性自体に普遍的妥当性が含まれていると考えられる。Prät. が用いられているのは、それが Prät. で書かれている物語りの中に出てくるか、主語が故人の場合であろう。

⑬ Er stammte aus München.

⑭ Er entstammte einer alteingesessenen Familie. (Klappenbach)

以上のように Prät. は、その文の行為自体が [a vor s] に限定されなくても過去を示すコンテキストの中で影響を受け Prät. という文法形態をとっていることをみてきた。この場合の Prät. は、過去の意味を有するコンテキストのレヴェルをただ指示する機能を持っていると考えられるのである。ここで Prät. を用いた文が、過去の事柄を表わしている場合を考えてみよう。この場合の Prät. は、物理的時間関係では [a vor s] を示しているが、それは Prät. 自体の意味機能によって表わされているわけではない。たとえば過去を表わす時間の副詞がある場合、その文で述べられた事柄が発話時より以前にあることは時間の副詞が示し、Prät. という文法形態は、時間の副詞によって表わされた過去のコンテキストのレヴェルをただ指示しているだけである。過去を示す時間の副詞が用いられず Prät. が使われている場合には、その文だけではなく前文との繋りから、話し手と聞き手の間に発話時よりも過去のある事柄について話されているのだという諒解が既になされているというこ

とを示している。それ故やはり Prät. は、それよりも前に述べられている過去を表わすコンテキストのレベルを指示しているのである。従って、過去を表わす時間の副詞を使わずに何か過去の事柄について話しを始める際、Prät. を用いると、過去を示すコンテキストがないためにその指示するレベルが曖昧となるであろう。

2.2. Perf. の義務的使用 (Prät. は使用不可)

2.2.1. 過去の事柄を表わす Perf. の場合、Wunderlich (1970) では既述のように $\left[\begin{array}{l} \beta \\ a \\ \text{übl s} \\ \text{vor s} \end{array} \right]$ の条件を満たす移行的動詞のみが、Perf. を義務的に用いるという規則を立てている。たとえば、Bettina ist eingeschlafen. (Wunderlich S. 142) では発話時より以前に Bettina が眠り込み ([a vor s])、発話時においてもなお Bettina が眠っている ([β übl s]) 場合に Perf. が義務的となる。しかし、動詞が移行的動詞でなくても Perf. を義務的に用いる場合がある。

- (1) In diesem Augenblick, in dem ich spreche, hat der Maurer drei Stunden gearbeitet.
- (2) *In diesem Augenblick, in dem ich spreche, hat der Maurer gearbeitet.

(Latzel 1977, S. 148)

(1) の文は「私が話しているこの瞬間に左官がある行為 (3 時間働く) を完了した」ことを表わしているが、Perf. という文法形態自体は、発話時点にある行為が完了したことを意味しているのではない。このことは Latzel も指摘しているように、(2) の文で動詞 arbeiten を Perf. にしても認容できないことから明らかである。Perf. は単に発話時点より以前に行為があった ([a vor s]) ことを表わしているにすぎない。発話時点よりも以前に生じたこの行為は、「in diesem Augenblick, in dem ich spreche」によって発話時点に引き寄せられる。この副詞句は [+ punktuell] な事柄を要求するので、行為の始まりあるいは終りを表わす動詞が必要となる。「arbeiten」は [+ durativ] な動作であり、単独では「in diesem Augenblick」と矛盾するが、「drei Stunden」を付け加えることによって行為の範囲が限定され、従って(1) の文は認容可能となるのである。ここで Perf. 自体の意味を [a vor s] と考えたが、過去の事柄を表わし得る Prät. がこの場合なぜ認容不可能となるのであろうか。これは既述したように、Prät. は物理的時間関係でみると [a vor s] を表わす場合が多いが、Prät. 自体は過去の意味を有するコン

テキストのレベルを指示するのであるから、同一文中に発話時点と同時であることを示す副詞句（「私が話しているこの瞬間に」）がある場合には相容れないのである。これに対し、Perf. は直接発話時点と行為との時間的前後関係を示しているの、発話時点を示す時間の副詞があれば行為の終りと発話時が重なるのである。それ故当然、Perf. は行為の後の発話時における状態を表わし得るのであり、Prät. は過去のコンテキストを指示しているのだから発話時の状態は問題とされないのである。

2.2.2. 未来のある時点（まで）にある行為を完了している、ということを表わすために Fut. II の他 Perf. が使われる。しかしこの場合も Perf. 自体が示すことは「完了」ではなく、未来の時点と行為との時間的前後関係だけである。これは、過去の事柄を表わす Perf. の発話時と行為との時間的前後関係が、未来を示す時間の副詞によって未来の時点に移されたのである。Wunderlich (1970) はこの場合にも移行的動詞（「Morgen um diese Zeit ist Adrian abgefahren.」）だけを認容可能と考えているが、2.2.1. で述べたような現象が認められる。未来のある時点に行為が完了していることを示すためには〔+durativ〕な動詞を単独に用いることはできないが、これが限定されることによってそのような動詞を含む文も認容可能となる。

(3) Morgen um diese Zeit bin ich mindestens 30 Km gewandert.

(4) *Morgen um diese Zeit bin ich gewandert.

2.2.3. 下記のような特定の言い回しにおいては Perf. が義務的に用いられる動詞がある。これらは行為の後の状態を表わし、すべて発話時に直接関係づけられている。

(5) Endlich haben die Schüler die Regel gefressen.

（生徒たちはやっとこの規則を理解した）

（Hauser/Hoppe 1972, S. 65）

(6) Er hat es auf ihr Geld abgesehen.

（彼は彼女の金が目当てだ）

（Latzel 1977, S. 81）

(7) Was hat er denn schon wieder ausgefressen ?

（一体彼はまた何をしでかしたのか）

(8) Sie hat es ihm mit ihren schwarzen Augen angetan.

（彼は彼女の黒い瞳にすっかり参っている）

2.3. 随意的使用

Prät. と Perf. が義務的に用いられる場合の意味機能を考察し、Prät. には過去の意味を有するコンテキストのレベルを指示し、Perf. には出来事を直接発話時点（あるいは未来の時点）との時間的前後関係において捉える機能があることを認めた。しかし、この2つの機能の相違は根本的に存在するにしても、前述のように比較的わずかな義務的使用を除けば文法規則としては捉えられない。つまり、過去のレベルが話し手と聞き手によって諒解されてしまえば、Prät. が過去のコンテキストを指示するということは、多くの場合物理的時間関係の中において結局発話時より過去のことを表わしているのであり、Perf. を用いて過去の事柄を表わす場合との時間的な相違がないので Prät. と Perf. は随意的に使用されることになる。この場合どちらの時制形態を選択するかは話し手の主観的判断に委ねられることにはなるが、その際にも行為を直接発話時との時間的前後関係で捉えるか、過去のコンテキストのレベルへの指示を重視するかによって両者の優位性 (Präferenz) が生じてくると考えられる。そしてこの優位性は、テキストの種類と時制使用との関係にも現われてくる。Weinrich は物語る時制グループ及び言及する時制グループと文学ジャンルの種類との相関関係を考えているが、これは「物語る」あるいは「言及する」心的態度というよりも、過去のコンテキストのレベルを指示するか、発話時との関係を表わすかによって、時制とテキストの種類の繋りが生じていると考える方が妥当である。ここでテキストの種類（発話の場）による Prät. と Perf. の使用頻度の違いを示す統計を挙げる。（これは Latzel (1975) が Gelhaus (1969)、Hauser-Suida/Hoppe-Beugel (1972) 及び彼自身の調査を基に行なった数値である。随意的使用と義務的使用の区別がなされていないが後者は数の上からは少ないのでパーセンテージにそれ程影響を与えないであろう。)

	Prät.	Perf.	Belege
1. Erzählende Literatur (Romane usw.)	9 6.1 6%	3 8.4%	1 0,7 8 5
2. Memoiren	8 8.3 7%	1 1.6 2%	6,9 2 9
3. Bild-Zeitung	8 5.6 8%	1 4.1 4%	1 2,0 0 2
4. Wissenschaftliche Buchliteratur	7 2.5 3%	2 7.4 7%	1 3,2 9 6
5. Briefe	5 9.8 6%	4 0.1 4%	5,0 0 7
6. Dramen	5 1.9 4%	4 8.0 6%	2,0 8 3
7. Romandialoge	5 1.5 1%	4 8.4 9%	1,4 2 4

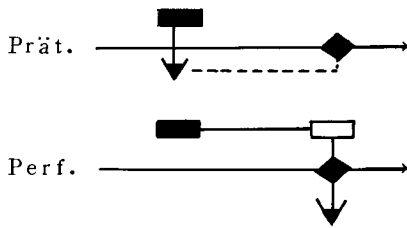
8. Dialoge (gesprochenen Sprache)	4 1.9 1%	5 8.0 9%	4,9 6 8
9. Regeltexte (Kochrezepte, Spielregeln usw.)	3 1.2 4%	6 8.7 6%	1,1 0 1

物語、回顧録、新聞、学術書において Prät. が多く使用されているという事実は、発話時との関係が重要ではなく、過去のコンテキストのレベルを指示しながら話しを進めていくためである。

「物語る」あるいは「回想」(Brinkmann)という心的態度は、この Prät. の指示機能の結果として感じられるのである。一方、手紙、戯曲、ダイアログ等では Prät. と Perf. の頻度数は同じ程度であるが、前者と比較して Perf. が多く用いられているのは発話時との時間的前後関係が意識されているからであり、その帰結としてやはり「言及する」あるいは「判断」(Brinkmann)という態度が感じられるのである。

注

- 1) Präsens, Präteritum, Futur I, Plusquamperfekt, Futur II は以下次のように略す。Präs., Prät., Fut. I, Perf., Plqu., Fut. II,
- 2) Prät. と Perf. の使用は地域的にかなり異なっており、南ドイツでは15世紀以来「Präteritum-Schwund」がみられ、現在では Prät. の使用は稀である。(O. Behaghel 1924)
- 3) Duden Grammatik の第2版(1966)と第3版(1973)を比較してみると、時制に関する記述がかなり異なったものになっているのは興味深い。第2版では Weinrich, Brinkmann, Kluge 等の見解をとり入れたが、第3版ではこれらの話し手の心的態度による説明は影を潜めている。
- 4) Gelhaus による Perf. のこのような解釈は、ドイツ語において Perf. が使われ始めた頃の意味に似ているといえよう。Perf. は Ahd. ではまだ時制として確立していなかったが、既に9世紀頃、Prät. の機能の一部を明確に表わすために「haben (sein) + Part. Prät.」による書き換えが行なわれており、これは過去の行為の後に続く現在の状態を示すものであった。たとえば「er ist gestorben」は元来「er ist ein Gestorbener」という状態を表わし、「er hat es gefunden」は「er hat, er besitzt es als gefunden」を意味していたのである(O. Behaghel 1924, S.271)。
- 5) Latzel (1977)もまた Betr. の概念を用いて Prät. と Perf. を図示している。彼の場合、Betr. は話されている事柄が話し手によって知覚される(wahrnehmen)時間だと考えられている。



Sprecher : { Ich sah : } Jemand
kam durch den Garten.

Sprecher : { Mit Blick auf Spu-
ren : } Jemand ist durch den Garten
gegangen.

→ 時間の流れ (左→右) を表わす。

◆ = Sprech-Akt

■ = Akt, dessen Zeit gesucht wird

□ = Nachzustand von ■

▼ = Betrachtungs-Akt

6) Öff = Öffentlichkeit. { + Öff } は時計体系やカレンダー体系に関する表現を示す。

{ - Öff } は発話時点に対し時間的な近接あるいは遠隔を表わす不確定な時間表現を示す。

7) Hypoth = Hypothetisch (Präsumtiv)

8) Hauser-Suida/Hoppe-Beugel (1972), Latzel (1977), Markus (1977) は、Prät. と Perf. の義務的及び随意的使用を区別している。

Hauser-Suida/Hoppe-Beugel は、Kluge, Weinrich 等の心的態度による規定を批判し、Prät. 及び Perf. を基本的には時間関係で捉え、次のような機能を認めた。

Prät. { 機能 I : 話す時点からの隔たりを表わす。
機能 II : 話す時点からの隔たりではなく、単に Vergangenheitskontext を示している。

Perf. { 機能 I : 話す時点からの隔たりを表わす。
機能 II : 現在 (あるいは未来) のレベルに関する完了性 (Abgeschlossenheit = Vollzogenheit) を表わす。

Prät. 機能 I と Perf. 機能 I は随意的に用いられ、Prät. 機能 II、Perf. 機能 II はそれぞれ義務的使用になると考えられている。

Literaturverzeichnis

Baumgärtner, Klaus/Wunderlich, Dieter : Ansatz zu einer Semantik des deutschen Tempussystems. In: Der Begriff Tempus-eine Ansicht-

- sache ? (= Beihefte zur Zeitschrift " Wirkendes Wort " 20),
Schwann, Düsseldorf 1969, S. 23-49.
- Behaghel, Otto: Deutsche Syntax, Bd. 2, Carl Winter's Universitäts-
buchhandlung, Heidelberg 1924.
- Brinkmann, Henning: Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung,
Schwann, Düsseldorf 1971 ('1962).
- Chomsky, Noam: Aspects of the Theory of Syntax. Cambridge, Mass.:
MIT-Press, 1965.
- Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (= Der Große Duden,
Bd. 4), bearb. v. Paul Grebe, Mannheim ³1973 (²1966).
- Gelhaus, Hermann: Zum Tempussystem der deutschen Hochsprache. Ein
Diskussionsbeitrag. In: Wirkendes Wort 4, 1966, S. 217-230.
Wiederabgedruckt in: Der Begriff Tempus-eine Ansichtssache ?,
Schwann, Düsseldorf 1969, S. 5-22.
- Gelhaus, Hermann: Sind Tempora Ansichtssache ? In: Der Begriff
Tempus-eine Ansichtssache ?, Schwann, Düsseldorf 1969, S. 69-89.
- Hauser-Suida, Ulrike/Hoppe-Beugel, Gabriele: Die Vergangenheitsstem-
pora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart
(= Heutiges Deutsch I / 4), Hueber, München 1972.
- Kluge, Wolfhard: Perfekt und Präteritum im Neuhochdeutschen, Diss.
Münster 1961.
- Kluge, Wolfhard: Zur Diskussion um das Tempussystem. In: Der Begriff
Tempus-eine Ansichtssache ?, Schwann, Düsseldorf 1969, S. 59-68.
- Latzel, Sigbert: Perfekt und Präteritum in der deutschen Zeitungs-
sprache. In: Muttersprache 1 1975, S. 38-49.
- Latzel, Sigbert: Die deutschen Tempora. Perfekt und Präteritum
(= Heutiges Deutsch III / 2), Hueber, München, 1977.
- Markus, Manfred: Tempus und Aspekt, Fink, München 1977.
- Reichenbach, Hans: Elements of Symbolic Logic, The Free Press, New
York 1947.
- Weinrich, Harald: Tempus. Besprochene und erzählte Welt, Kohlhammer,
Stuttgart ²1971 ('1964).

Wunderlich, Dieter: Tempus und Zeitreferenz, Hueber, München 1970.

(長崎大学非常勤講師)